

はじめに

成長社会から成熟社会へと移行した昨今、誰もが、様相を変えた社会に困惑しているのではないのでしょうか。中でも、社会のしわ寄せを受けやすく、感受性の強い子ども・若者世代でそれは顕著であるように感じます。文部科学省が平成 24 年度に行った「学校基本調査」によりますと、大学新卒でも長く厳しい就職活動を強いられて、あえなく非正規雇用や一時的な職に就く若者は日本中で 7.4%にものぼります。

また、県の「平成 23 年度山梨県教育統計調査結果報告」では、小学校で不登校となったのは 142 人、中学校では 686 人という結果が出ています。この数字は決して少ない数ではありません。

こうした中、若者の健全育成を支えていくためには、社会への扉を開こうという若者の思いをなんとかカタチにし、困難を抱えている若者には『どうしたの?』と寄り添う大人力が必要なのは、もはや歴然だと思えます。

当たり前のことですが、人は一人では生きられません。

若者が必要としているときに、すかさず手を差し伸べられる。こうした若者を支える『人の手』は、新たなる『人の手』を育成していきます。こうした『人の手』のつながりが、人が支え合いつながり合って生きる社会、人と人とが本来の力を発揮できる社会へとつながっていくのではないのでしょうか。

まずは私たち一人ひとりがそんな『人の手』を養っていかなければなりません。



第1章

君を待つ場所



1. 1歩踏み出せる場所づくり

価値観の多様化、雇用環境の変化、家庭や地域の養育力の低下などの社会変化による若者の引きこもり、ニート、不登校などの問題が社会問題となっています。

家庭や学校に居場所を見出せない若者たちに「まずは外に出てみよう」、「学校には行きたくないけど、あそこなら行ってみたい」と社会に出て人と交流する第一歩を踏みだしてもらうためには、どうすれば良いのでしょうか。そのためには、若者が安心して「始めの一歩」を踏みだせるようなふれあいの機会と場を地域等につくる必要があります。その場所には管理人を配置して、保健室のような相談を受けられる体制を整備する必要があると思います。

また、このままではいけないと思っている若者やどこへ相談して良いのか分からない家族や関係者たちが抱える悩みに対応するために、「ワンストップ窓口」を設置し、悩みに対応していく体制も整えていく必要があると思います。

<県には・・・>

- ① 1歩踏み出せる場所の提供（「Welcome Cafe」、「Happy Cafe」などの名称をつけて）
→運営団体の募集又は管理人の選抜（NPO などから管理人として適切な団体、人の選出）
- ② 医療機関や就労支援機関、福祉施設などと連携してサポートする「ワンストップ相談窓口」の設置

2. 若者応援ネットワークづくり（若NET）

現状では、幼い子どもや親へのバックアップ体制は整っていますが、思春期以降の親子への支援やバックアップ体制については、各団体がそれぞれ活動を行っている状況でした。

若者に関する重層した問題に対応していくためには、行政だけが担うことはもはや不可能であり、行政、NPO、若者育成団体、企業、地域、医療、法律等各専門機関が一緒になって取り組むことが必要です。

思春期以降の若者への支援を社会全体として取り組むため、各関係団体をネットワーク化することで、それぞれが持つ知識やノウハウを縦横無尽に重ねていくことが可能になり、リアルタイムな情報交換、包括的な支援を行う環境づくりを行うことができると考えます。

ネットワークについては、立場による席順を定めず、円卓を囲んで行う会議（円卓会議）のイメージで、SNS（フェイスブック）を手段として、構築をします。

行政、NPO、若者育成団体、企業、地域、個人、医療、法律等各専門機関等が、フェイスブックを手段としてつながることで、透明性のある情報

の開示、共有化が可能となります。

また、各団体の活動状況や設立趣旨が明確に分かるため、コメントをすることで、目的に沿った意見交換ができます。

<県には・・・>

①フェイスブックを立ち上げる。(絆ネットワークをベースに。元になるもの 山梨県)

②ネットワークに参加する団体の把握(活動団体の把握、データベース化)

③各団体の育成(研修)

- ・受講団体は、抱えている課題を提出
- ・フェイスブックの活性化のために、「いいね  」をたくさんもらったら、団体に特典を特典のイメージ

例：〇〇年バックアップ大賞 として、県広報やHPで活動を取り上げる
(団体、企業、個人・・・)

- ・イベントなどの場を活用して、各団体が一堂に会する場を設ける(すべての団体はあくまでも対等)
→ワールドカフェやミーティングなどの方法でお互いの意見を交換
- ・年間を通して、ネットワークの構成団体の活動についての検証をPDCA チェックと改善を必ず行う。
- ・委託とか補助ではなく、協働する一参加者として行政も協力運営する。



3. やまなし寺子屋の開催

「格差社会」「貧困」が社会問題化する中、親の経済格差が生み出す貧困により、進学段階で不利な状態になる若者や、経済的理由で高校を中退せざるを得ない若者がいます。平成 22 年に内閣府が発表した共生社会政策関係都道府県別指標データによると、山梨県の高初中退者数は 382 人となっており、必ずしも少なくありません。

このような若者たちは、一度中退してしまうと「学校」という居場所を失う上、再度『学びたい』と思ってもなかなか学ぶ機会や場所がないのが現実です。「勉強をしたいから塾に行きたくてもお金がない」、このような若者に対する支援は必要不可欠ですが、現状では十分な支援体制はないと言えるのではないのでしょうか。

また、教育を受けられないことによる経済的格差が生み出す不利益は、将来的に不安定な収入・労働条件として表れ、大人になって次世代へと引き継がれる「貧困の連鎖」を生み出す恐れがあります。子どものスタートラインからの差を断ち切り、「貧困」という負の連鎖から抜け出させ、若者が自らの力で将来を切り開く力を養うためには、一度学習の場から脱けてしまった若者に、再度教育を受けられる環境をつくる必要があります。

不登校や不登校気味、中学卒業後や高校中退後に進学就職できずにいる子は、必要な相談や支援がなされなかったり、居場所を見いだせなかったり、孤立している現状があります。この子たちは、どこにも所属していない不安と、所属することへの不安を持ち合わせています。

バックの支援が弱い子ほど早く社会に出なければなりません、今のご時世では大卒でも就職は困難です。

子どもたちにわかることの面白さや、人と交わる楽しさを積み重ねて、わからない不安を減らしていくには、経済的格差からくる体験（塾・クラブ活動・芸術鑑賞など）格差で子ども達の希望を失わせない（どうせ自分には出来ない、自分そのものが無駄だと思う）ことを考えていく必要があると思います。

-3-

親や教師に反抗的になり、友達との関係を重視する不安定な子どもにとっては、高校生や大学生など、年の近いナナメの関係と積極的に関わることで、学習意識（確かな学力・学歴）を高めることができるのではないのでしょうか。

引きこもりや非行や自死など、子ども若者が陥りやすい問題に向かう最後の一线を、超えるか超えないかは、自己肯定感を思春期の子ども若者が持てるか持てないかではないかと思えます。自尊心や安定した愛情や居場所がないとしんどい時にふんばれません。

<目的>

1. 義務教育卒業程度の最低限の基礎学力を保障することで、自己肯定感を高める
2. 学校以外の、同じ目的を持った仲間と学ぶことで、コミュニティ能力を高める
3. チューター（学習ボランティア）を養成（スキルアップ）させ、子ども若者への支援者を増やす

<内容>

○安心して誰でも学べる環境と機会を保障するための（仮名）やまなし寺子屋を平日夜と土曜日開催。

○学習プログラムは、最初に面談を実施。個人に合ったカリキュラムを組む（学校の宿題・定期試験対策・高校受験・高卒認定試験・漢検・英検など）ただし、学習内容は自学自習形式が主（自ら学ぶ段取りを付けさせる・成長を実感させる）とするが、フォローは行う。

○チューター（学習ボランティア）は、月に一度全体ミーティングを実施し、参加している若者のつまづきを共有する（負担を軽くする）

○長期休みを利用した合宿を実施。学習意欲を高めるためのワークショップを開催する。

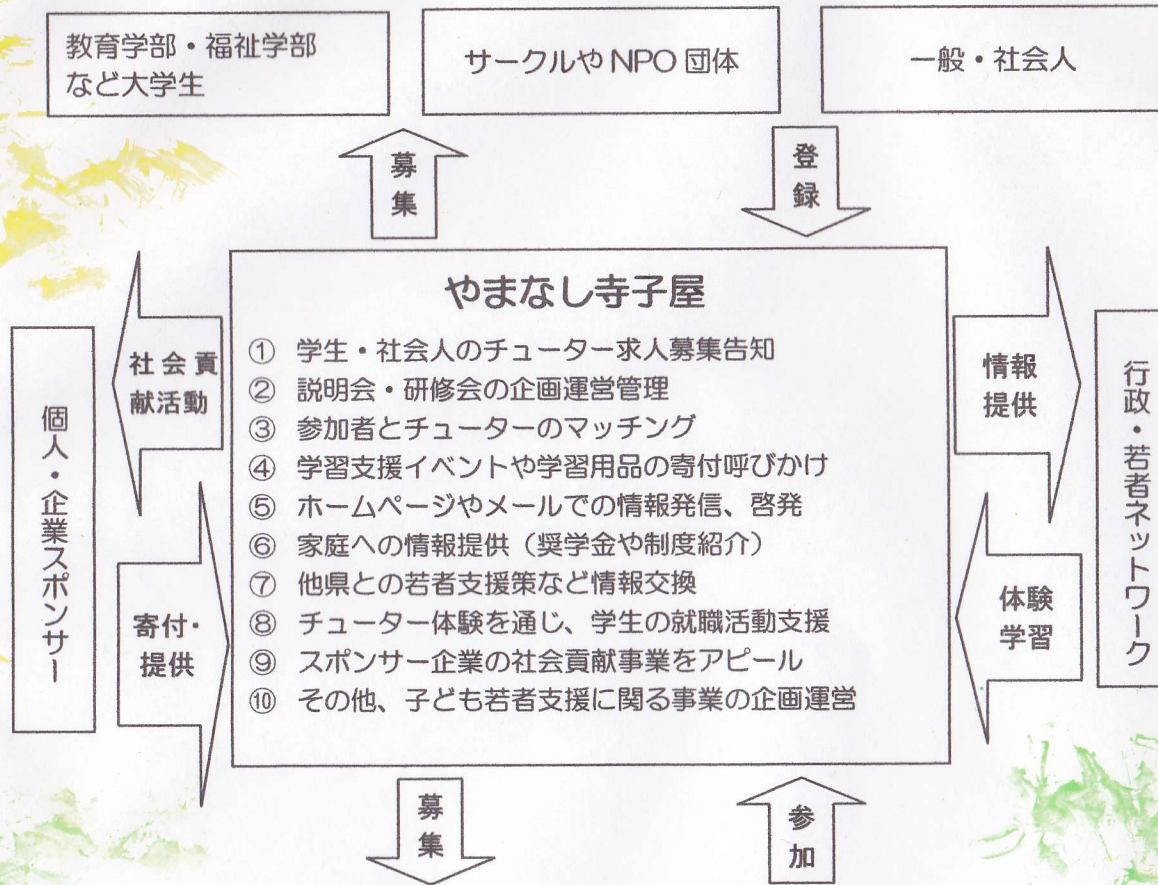
<県には・・・>

県が直接事業を行うのではなく、多様な主体と協働して行う

- ① 協力する事務局団体の選定（NPO・青少年団体・市民団体・社会福祉士・スクールソーシャルワーカーなど）
- ② 学習スペース確保（参考書・PCなどが揃っている。交通の便が良い場所の確保）
- ③ チューターへの交通費。（大学生のボランティア募集。社会の担い手支援リーダー証などを発行）



学び場の保障を目的に、全ての企画・運営・管理を組織化し、事業の確立を目指す。



◆参加条件は「学びたい気持ちがあること」
 例えば・・・
 不登校や引きこもりなどで集団の学習がしんどいと感じている
 学びたい気持ちを持っているけれど事情があって学ぶ場がない
 学び直したい
 居場所のない など県外の自主夜間中学をモデルにしたらどうか？

親の年収と子供の学力テストの関係

